

大学の図書館

第43巻第10号 (No.611)

2024 10



目次

つながるバトン	赤澤 久弥 ...157
特集：全国大会フラッシュ	
ありがとうございました！ 第55回全国大会振り返り	加藤 晃一 ...158
課題別分科会「資料保存」を担当して	北川 正路 ...159
第2分科会の反省	楫 幸子 ...161
全国大会に参加して	中川恵理子 ...163
第5分科会	
出版・流通「学術論文の即時オープンアクセスと図書館」を運営して ...	吉田 弥生 ...164
第6分科会「レファレンスで困ったネタを語り合う会」裏話	小林 泰名 ...165
初めての全国大会	地紙慎太郎 ...166
スクリーン越しに感じる全国のつながり	伊賀由紀子 ...168
久しぶりに全国大会に参加して	中條 将喜 ...169
大会実行委員であり、大会参加者であること	小村 愛美 ...170
大会実行委員から：企業協賛の振り返り	渡邊 伸彦 ...171
議事要録	174
組織通信	174

つながるバトン

赤澤 久弥

大学図書館研究会ウェブサイトにある全国大会一覧のページを見ると、55回を迎えるまでに積み重ねられてきた、大図研の歴史を実感させられます。そして、その積み重ねの中で、時々状況に応じて、全国大会のあり方が変わってきていることも分かります。例えば、長らく各地の支部（現地域グループ）が運営を担って開催していたところ、第44回大会以降は実行委員会形式で開催されています。また、オンラインでの開催も、この度の大会を含めて4回を数えるまでになりました。

これらは、地域グループだけでは運営することが難しくなってきたり、コロナ禍により集合しての開催が難しかったりした中で、大会を続けていくための工夫でした。しかしながら、実行委員会も12期を重ねる中で、大図研としての大会運営のノウハウを蓄積してきていますし、当初は試行錯誤だったオンライン大会も、参加者のご協力もあって、滞りなく開催できるようになっています。

とはいえ、実行委員会はテンポラリなものですから、体制構築が都度の課題になります。そこで今大会では、実行委員募集の呼掛けに応じた会員と共に、従来の大会では、主に分科会の運営に関わっていた全国委員も、大会実行委員として、大会全体の企画・運営に参画しています。そうして、これまでの大会の枠組みを踏まえながら、今期の実行委員メンバーにより検討した取組みを加えて、今大会は開催されました。こうした大会運営の裏側は、今号の寄稿から覗いていただけたと思います。

さて、大会期間中に開催された会員総会では、会長のバトンが渡されました。全国大会のあり様も変わってきたのと同様、大図研のあり方も時代に応じて、今後も変化していくのかもしれませんが、そうしたことも含めて、大図研を会員の皆さんと一緒に受け継いでいく機会のひとつとして、次回全国大会にバトンを渡していければと思います。つながってきたバトンをつなげていくために。

（あかざわ・ひさや／京都大学附属図書館）

特集：全国大会フラッシュ

大学図書館研究会第55回全国大会は、2024年9月21日（土）から22日（日）の2日間、Zoomを用いたオンラインで開催されました。ご参加くださいました各位に、また全国大会にご協賛くださった企業の皆さまに篤く御礼申し上げます。

今号では、「大会フラッシュ」として、本大会参加者、本大会実行委員の方々に、全国大会に出席した印象や出席して感じたこと、関心を持ったこと、思い出に残ったことなど自由にご執筆願い、本大会の内容を速報として振り返ってみました。

なお、本大会の公式記録は、本会報2024年12月号で「大会記録号」として掲載します。乞うご期待。

（特集企画担当：会報編集委員会）

ありがとうございました！ 第55回全国大会振り返り

加藤 晃一

はじめに

大学図書館研究会第55回全国大会（以下、全国大会）は104名の参加者をもって全日程を無事終了しました。全国大会実行委員長（以下、実行委員長）として、参加された皆様と支えていただいた全国大会実行委員会（以下、実行委員会）の皆様には厚く御礼申し上げます。この場を借りて実行委員長就任から全国大会終了まで振り返ってみようと思います。

1 実行委員長就任

1.1 全国委員会での驚き

2023/2024年度 第2回全国委員会（2023年12月24日）における全国大会の審議について、呑海会長から「翌年の1月中旬に全国委員から全国大会実行委員長が出せないなら全国大会は開催しないこととする」という提案があり、大図研会員歴約40年の私には「常任委員会が全国大会の運営を放棄する」としか思えず、「重要案件なので総会に諮るべき！」と訴え

ましたが承認されてしまいました。私は浅草の下町っ子に囲まれて育ったこともあり道理に合わないことには義憤に駆られることが時にあります。「1月中に自薦・他薦がないなら私がやる」と宣言した結果、実行委員長となりました。今回の実行委員長への自薦は「大学図書館問題研究会の50年の歴史の道理に合わない」ということと大図研に対する思いが重なったゆえの行動といえましょう。

1.2 実行委員会キックオフ！

幸いにして過去の実行委員会経験者や全国委員の方々から積極的な参加があり実行委員会が整い、5月12日にZoomにてキックオフ・ミーティングを行い、backlog (<https://backlog.com/ja/>) を使って課題を立てて準備を進めていくことになりました。backlogを使うのは私自身初めてでしたが実行委員会では既に導入されていて慣れていた方も多く、私も徐々に慣れていきました。私の仕事は基本的に全体統括でしたので実行委員の方々から出される課題をチェックし迅速に安心して準備が進められるよう心掛け、多少の進捗の遅れ、受付のイレギュラー対応などあったものの概ね順調に準備が進んだのは手練れの実行

委員の方が多かったからだと思います。

1.3 全国大会

最終的な参加者は104名とオンライン形式としては少々少ないかな？と思いましたが三連休の中での開催に熱心に参加していただき、嬉しく有難くという気持ちでした。オンライン形式の全国大会は4回目ということもあって当日はZoomのトラブル以外は特に心配しませんでした。幸いにして大きなトラブルもなく、私も参加者として楽しめましたし例年以上に積極的に参加できた大会となりました。とはいうものの対面形式のリアルな全国大会にあるライブ感がなく、旧知の仲間、新しい仲間と直接交流できない物足りなさはありました。発表者としては分科会や自主企画での反応が気になるものなのです。

2 第4分科会「大学図書館史分科会」の運営

2.1 企画意図

今回も大図研の歴史を振り返ることとして大学図書館史分科会は「大学図書館問題究会の歴史を見るPart8」をテーマとし、内容は五十周年記念事業記念出版物（以下、記念出版物）の刊行を予定していることから担当の北川正路氏に構想を伺い、大図研50年の歴史を俯瞰するとともに記念出版物について広報できれば、と考えたものでした。

2.2 記念出版物はどうなる？

北川氏からは記念出版物の編集作業状況についての報告の中で現時点での出版物の記念誌の構成案を説明いただきました。詳細は省きますが大図研の「顕著な動き」として大図研の歴史を振り返る予定で、歴代委員長の就任期間をベースとし大図研の活動を主な活動をまとめる予定で考えているそうです。北川氏からの報告を受けて参加者からは押さえるべきトピック、委員長だけでなく事務局長や常任委員会などの動きについても注目すべき必要性などが提案されました。これまで本分科会で7回に分けて大図研の歴史を振り返っ

ていますが、その復習と記念出版物に深みをもたせる意見交換ができたものと思っています。記念出版物の刊行を楽しみに待ちましよう。

2.3 自分のネタ

今年度上半期のNHKの朝の連続テレビ小説『虎に翼』（放送終了、<https://www.nhk.jp/p/toranitsubasa/ts/LG372WKPVV/>）を毎回楽しく視聴していたのですが、ヒロインが学ぶ場として大学図書館シーンが数回登場し画面に出た大学新聞にも図書館に関する記事があり、モデルとなった明治大学図書館の歴史を調べたところ、ほぼ事実に沿ったものでしたので大学図書館史のトピックとして取り上げ報告しました。これに別の図書館関連シーンや他のドラマの図書館シーンなどもまとめて自主企画でもお話しした次第です。

おわりに

私にとって大図研は「年長者（年寄り）はあまり口出しせず若手・中堅の図書館員の活躍の機会を提供する場」と長年思っていますので、今回実行委員長を務めたのは「例外」「緊急事態」ゆえと考えています。新年度から新しい会長を迎える大図研、これからは「年寄りの出る幕はない！」と言ってもらえることを期待して第55回大会の締めくくりにさせていただきます。皆様、ありがとうございます。

（かとう・こういち／千葉大学附属図書館）

課題別分科会「資料保存」を担当して

北川 正路

1. はじめに

第55回全国大会にて、課題別分科会「資料保存」の開催準備と当日の進行を、昨年に

引き続き、京都地域グループ全国委員の山上朋宏氏と担当した。今回は、「資料保存における地震対策」をテーマとして取り上げた。開催方法は、昨年の対面とは異なり、オンライン形式であった。

本稿では、分科会担当として対応した内容を振り返り、感想を交えて紹介する。

2. 分科会テーマの設定

分科会を担当するにあたり、まず、テーマを決める必要がある。

今年の3月に分科会担当が決まった後、会報6月号に掲載される分科会案内の原稿の締切りまでの間、担当者間で話し合い、今回のテーマは、「資料保存における地震対策について」とした。数々の地震発生により、地震の被害に対する懸念が高まっており、図書館での地震対策に関心をもたれていることを考慮して、地震対策に関するテーマとした。「災害は忘れたことにやってくる」といわれる。分科会のテーマとして取り上げることで、地震対策への意識づけにもつなげていくことを考えた。

分科会の用意では、山上さんとは、メール交換だけでなく、適宜、Zoomを利用してオンラインでも打合せの機会を持った。

分科会のテーマを決める際は、「今、必要だ」と思われるトピックをテーマとすればよいのだが、担当としては、議論が短時間で終わらず、参加者全員が、終了時刻まで関心を持っていただけるように、分科会全時間を通して活発な意見交換がなされるテーマを設定することも課題となる。

3. 分科会の内容の用意

分科会の進め方として、大図研会員に報告を依頼する、会員以外に講師を依頼する、分科会参加者で意見交換するといった方法が挙げられる。

分科会の内容は、会員以外の講師による報

告、講演のみとするのではなく、会員がテーマに関する報告をしたり、意見交換をする機会とすることが望ましいとの指摘もある。昨年の「資料保存」分科会では、テーマとして掲げた「資料保存技術の継承と伝達」と完全に一致する活動をしている「修理系司書の集い」のメンバーと山上さんがコンタクトをとることができたため、会員ではない「修理系司書の集い」のメンバーに講師を依頼した。修理系司書としてのご経験、「修理系司書の集い」で実施した館内修理に関するアンケート調査の結果について説明があり、テーマに即した有益な報告を受けることができた。更に、山上さんから参加者を対象に実施した事前アンケートの集計の紹介があり、私から歴史資料保存についての事例報告をして、会員間の意見交換につなげることができたと思っている。

昨年と異なり、今回は、会員に事前に報告を依頼したり、会員以外に講師を依頼したりすることはしなかった。分科会の用意として、当初、山上さんが、大図研の会報に掲載された震災に関連した記事の一覧を作成していたため、それら記事の著者のどなたかに分科会で報告をしていただけるかの打診をすることを考えた。しかし、全国大会にあまり出席されていない方がほとんどであり、また、全国大会に頻繁に出席されている方には、参加する分科会のうちの1つを限定させてしまうことになるため、著者のどなたかに、「資料保存」の分科会での報告の打診をすることを躊躇し、今回は、報告者なし、講師なしの内容で進めることとした。

報告者や講師からトピックが提示されることはないため、参加者の事例や考えを共有することができるように、事前に、山上さんが、参加者を対象としてアンケート調査を実施して、集計結果をまとめた。私は、進行役を務めることとなったため、資料保存の地震対策に関する記事を参照して、要点を抜き出し、

意見交換するための項目をまとめた。

分科会のテーマは「資料保存における地震対策について」としたが、分科会開催の準備を進めていく過程で、「資料保存」に集中せず、関連して、「ひと」や「建物」への対応も含めた方が議論しやすいと考えるようになり、事前アンケートの設問や当日の意見交換の項目にも、「ひと」や「建物」に関する内容を含めた。

4. 分科会当日

上記の準備を経て、分科会当日を迎えた。

参加者へのアンケート調査の最終的な集計が前日となり、当日も、山上さんとは、全国大会の休憩時間を縫って、オンラインにて分科会の進行を確認するなど、あわただしさが収まらないままの状態、分科会の開始となった。司会は、担当の2名があたった。

最初に山上さんからアンケート調査集計の報告があり、その後、司会者2名を除き、14名から自己紹介があった。自己紹介の間にも、アンケート結果の集計にしばしば言及があり、アンケート調査は効果があったことを感じた。自己紹介の後には、意見交換となった。意見交換の進行中、オンライン形式であったため、発言者以外の表情が分からず、その時々話題に参加者全員が関心を持ってくださっているか不安に感じることもあった。一方、参加者の皆様には、発言がスムーズに続くように配慮してくださり、分科会の進行への協力にお礼を申し上げたい。地震を経験した図書館からの参加者の話も聞くことができ、また、図書館の被災を記録したサイトの紹介もあったため、テーマについて、机上の議論のみとならない意見交換をすることができた。書架に設置した落下防止の製品が、規格以上の振動であったため機能しなかった、といった被災館での経験談も出された。もちろん、被災の経験のない参加者からの発言も示唆に富むものであった。

「地震に対しては平素から備えることが必要である」、「震災、復旧の経験を共有、継承していくことが必要である」との話題が出され、分科会が終了した。

「資料保存」の分科会であるが、図書館は、利用者、周囲の方々、図書館職員の安全確保や避難方法についても配慮する必要があるとの指摘もあった。資料のことだけに視点を集中させるのではなく、震災の被害の全体に目を向け、その中で資料保存のことを考えていく必要があることも教えられた。

5. おわりに

以上、今回の分科会での担当としての対応内容を振り返った。

「資料保存」は、図書館の役割の1つである「資料利用の提供」を保証するために不可欠な業務である。この2年間、「資料保存技術」、「資料保存における地震対策」に関する2つのテーマについて担当したが、「資料保存」については他にも取り組むべき課題がある。今後も「資料保存」の分科会が継続され、大学図書館に必要とされる取り組みについて意見交換がなされることを願っている。

(きたがわ・まさみち／

東京慈恵会医科大学国際交流センター)

第2分科会の反省

楢 幸子

1. はじめに

第2分科会：学術情報基盤では、「機関リポジトリの表示設定とカスタマイズ」というテーマで情報交換をおこないました。当初企画したようには発表者が集まらなかったのですが、急遽お願いした発表者からの話題提供が的確で、特にリポジトリのデザインについて多方面からの視点を得ることができたので

はないかと思っています。

結果的には個人的に面白い分科会だったのですが、分科会の企画進行について、反省を込めて振り返ってみました。

2. 分科会の企画

全国大会の分科会は主に全国委員が企画していて、3月の全国委員会にてどの分科会を受け持つか決めます。今年は兵庫地域グループの有馬さんと学術情報基盤の分科会を担当することになりました。

担当になると、テーマや分科会の形式を決めて講師や発表者の手配をします。テーマは最近の話題から参加者が興味を持ちそうなことを探りますが、担当者が職場で解決したい課題を設定することもあります。

今回のテーマはリポジトリにしました。多くの機関が利用しているJAIRO Cloudについて、少々見づらいと思う画面デザインやアイテム表示、検索画面などをカスタマイズしている大学をばちばち見かけたので、それらの事例を持ち寄ったら参考になるのではと考えました。また、今後研究成果として紀要論文以外にも学術雑誌に掲載された論文を登録することになりそうなので、インデックスはどうするのか他大学の事例も知りたいと思っていました。

分科会の形式としては、表示についての色々な工夫や使いやすいデザインなどを参加者同士がプレゼンテーションするイメージで進めていきました。リポジトリ業務に携わっていない人もいるので、紹介するのはどこのリポジトリでも可とし、発表したスライドを提出してもらうことにより情報共有をするつもりでした。

会報6月号の原稿を提出する段階で分科会の概要を固めて、全国大会の予稿集では大まかな進行を決めました。

発表者数は事前アンケートにより確定しますが、アンケートを送信できるのは参加申し

込みが締め切られた後のためどうしても直前になります。参加者同士が発表する方式は何度か企画していて、実際に発表してくれるのは参加者の4分の1以下という感触でいましたが、心配はしていませんでした。

参加者が確定するまでに、より詳細な分科会進行を計画して、事前アンケートや分科会で使う共有メモを設定したり、進行原稿を考えたりしました。今回はこの時期に他の業務のため十分な時間が取れず、担当者2人で進行や役割分担について十分な準備ができなかったのも反省点です。

3. 分科会当日

事前アンケートのしめ切りは、直前の木曜日としていました。金曜日に参加者へ発表順と共有メモのURLをお知らせする予定でした。

しかし、木曜日に回答を確認すると、発表希望者は一人、自分だけでした。これは緊急事態です。急遽、その時点で回答がなかった方やグループ内の方へ発表を依頼しました。前日という時間がないなか快諾していただき、本当に有難かったです。

当日は私を含めて5名の発表があり、意見交換ではリポジトリのデザインについてや、表示速度の考察、研究データのメタデータについてなど様々な意見や情報が出されました。司会である私の力不足もあり、議論を深めるというところまではいけなかったのですが、多様な視点から今後のリポジトリ運営を考える機会となったのではないかと思います。

発表のスライドは実際のサイトを紹介したため提出できないものもあり、事後に情報共有するという目的は果たせませんでした。その代わり参加者が書き込める共有メモは、発表情報や参考サイトを載せることで一定の効果があったのではないかと思います。

4. 分科会の反省

事前アンケートでは、そもそもテーマとしているリポジトリのデザインやカスタマイズは必要かという問いかけがありました。他のデータベースの検索結果から論文本文へアクセスする使い方が主流なので、正確なメタデータと本文ファイルが提供できていればいいのではという意見です。

他にも、意見交換をする際に具体例が必要かと思ひスライド発表を提案したのですが、自館ではカスタマイズをおこなっていない、事前アンケートから分科会当日まで日数がないなどの理由により、スライドを作成するハードルが高かったようです。

事例や意見を募る方法として、スライド発表よりもグループディスカッションや、事例発表者を依頼する方が適切だったのではないかと考えています。

今回の分科会では、テーマ設定と分科会の進め方への検討が不十分で、参加者の期待に沿えなかった部分があったと思います。その点をしっかり検証して、次回以降の分科会にいかしていきたいです。

第2分科会にご参加のみなさま、ありがとうございました。

(かじ・さちこ／安田女子大学図書館)

全国大会に参加して

中川 恵理子

1. はじめに

金沢学院大学の中川です。第55回大学図書館研究会全国大会に参加しました。大会の様子や感想をレポートします！

2. 大会1日目

研究発表・事例報告からはじまりました。「図書館の実空間とデジタル資源の接点をデ

ザインする」は、「デジタル情報資源カード」についての発表でした。どの図書館でも、見えない図書館情報資源を利用者に認知させる難しさを感じていると思います。本学においても、図書館が契約しているデータベースや電子書籍を、利用者とのようにうまく結び付けていくかは大きな課題です。発表を聞きながら、ぜひ取り入れたいと思いましたが、こんな素敵なデザインのカードが作成できるのかと不安でした。しかし、Canvaでフォーマットを無料配布していることを知り、驚きました。間嶋沙知さんはデザイナーとして、図書館職員にはできない見せ方を実現できることに感心しました。

また、近畿大学の『Book: The Gathering』の事例報告も面白かったです。学生に図書館をどう楽しんで利用してもらえるかについて、ヒントを得た気がします。本のトレーディングカードは素晴らしいアイデアですね！ダムカードやマンホールカードなど、カードを集める事例は知っていましたが、図書館でも同様の取り組みがあるとは知りませんでした。デザインもかっこよかったので、私も欲しくなりました。

午後からの課題別分科会では、第3分科会キャリア形成「資格・検定を中心とした自己研鑽について」を担当しました。分科会に参加して下さったみなさま、ありがとうございました。分科会内で実施した事後アンケートの結果を確認したところ、参加者にとって実りのある分科会だったと思います。今回の分科会の内容を企画・運営してくれた下山さん、話題提供をしてくださった岡田智佳子さん、寺升夕希さんのおかげです。また、分科会参加者の皆さんが司書以外にも様々な資格を持っていることを知ることができました。他の図書館員の皆さんが自己研鑽を積んでいる姿を見ると、いつも私も頑張らないといけないと思います。

その後、交流会に参加して、リラックスし

た楽しい時間を過ごすことが出来ました。対面で顔を合わせたことがある方も、初めて参加される方も、お会いできてよかったです。交流会中、お酒やおつまみが話題で盛り上がりましたが、地酒の会が懐かしいですね。

3. 大会2日目

午前の分科会には参加できませんでした。が、午後からのシンポジウムに参加しました。「学生協働の現在」というテーマで、司会・コーディネーターを務めた和知剛さん、発表をしてくださった井上真美さん、青柳有紗さん、ありがとうございました。

学生協働の立ち上げから運営方法、課題まで、他大学の学生協働の事例をここまで詳しく聞く機会はこれまでありませんでしたので、大変参考になりました。本学でも学生協働を行っていますが、どこの図書館も抱えている悩みは共通のようです。ふみくら倶楽部の世代交代に関するスライドで紹介された「一度やれば、それは伝統」という言葉がとても印象的でした。本学の学生ボランティアたちにも、自分たちが伝統を作るのだという意識で取り組んでもらいたいです。そして、新しい取り組みにどうしても躊躇する自分自身にも響く言葉でした。今回のシンポジウムで得た参考になる部分は、ぜひ取り入れていきたいと思います。

最後は、加藤さんによる自主企画「図書館こぼれ話。見てたドラマに図書館が出てきた！」に参加しました。『虎に翼』にハマっている私にとって、楽しい会でした。この原稿を書いている本日が最終回でしたが、15分間ずっとテレビの前で号泣しながら見ていました。ドラマに登場する当時の大学図書館の様子を知ることができ、大変興味深かったです。

4. おわりに

今回の全国大会は、運営として参加し、多

くの方々の尽力があって無事に開催されていることを強く実感しました。全国大会実行委員長に加藤さん、実行委員会の皆様、本当にありがとうございました。また、来年の全国大会でお会いできるのを楽しみにしております。

(なかがわ・えりこ／金沢学院大学)

第5分科会 出版・流通「学術論文の即時オープンアクセスと図書館」を運営して

吉田 弥生

大阪地域グループ推薦の全国委員になって、全国大会の分科会運営を担当するのは今回6回目となりました。今年は九州地域グループの柿原さんと共に第5分科会「出版・流通」を担当しました。

この分科会では、昨年はリック・アンダーソン著『学術コミュニケーション入門：知っているようで知らない128の疑問』（2022年）を取り上げ、訳者の宮入暢子氏をお迎えして、学術情報流通に関して図書館員が知っておきたいことを広く俯瞰しました。それを受けて、今回はテーマを絞って参加者全員でディスカッションできるようにというねらいのもと、「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」（令和6年2月16日統合イノベーション戦略推進会議決定）ほかを受けて、目下、大学図書館職員をはじめとして関係者が多く関心を持っているだろうということで「学術論文の即時オープンアクセスと図書館」としました。当日は40名近い方々にご参加いただきました。

参加者のバックグラウンドは、会の冒頭に行ったミニアンケートの結果、重複を含めて電子ジャーナルの契約と機関リポジトリの担当者が数名程度で機関リポジトリ担当者の方

がやや多く、即時OAについては詳しくないので今回知るために参加したという方はざっと10名以上はいました。また、企業ご所属の方もありました。

分科会では、まずイントロダクションとして、担当者2名から日本の即時OA義務化方針に関する現時点での情報整理と、海外の各国の政策とOA化の状況について、それぞれまとめたプレゼンを行いました。その後、①自機関の論文投稿状況の確認や分析をどのように行っているか、②即時オープンアクセス対応に向けての、研究者への周知や研究者の負担軽減について、③即時オープンアクセスに対応するための、機関リポジトリ登録の体制整備について、参加者全員で自機関の状況の紹介やアイデアなどの意見交換を行いました。

詳細は12月号(大会記録号)に譲りますが、総じて、自機関の研究者の論文情報やライセンス情報をORCIDやDOIなどのPIDを使って各種のデータベースからWebAPIを使って自動取得することで研究者と機関リポジトリ担当者の労力を最小化しかつ正確なメタデータ作成が期待できること、そのために使えるツールや仕組みについて紹介された文献などについて、参加者の方々から積極的にご発言やチャット投稿いただき、多くの情報や示唆をいただくことができました。また、著者最終稿を収集することや、著者最終稿と出版社版の区別を研究者に理解してもらうことの難しさは各機関ともに共通した悩みのようでした。

分科会担当者は2名とも機関リポジトリの業務に携わったことがなかったため、参加者の皆様からの発言等に支えられた分科会となり、とてもありがたいことでした。この原稿を書いている9月29日現在、まだアンケートの結果を見ることができていないため皆さんが参加されてどのような感想を持たれたかはわからないのですが、少しでも何か持ち帰っ

ていただくことができたことを祈るばかりです。参加いただいた皆様、ありがとうございました。

(よしだ・やよい／大阪大学附属図書館)

第6分科会「レファレンスで困ったネタを語り合う会」裏話

小林 泰名

1. 分科会の内容

この分科会ではレファレンスサービスおよびそれに関わる文献検索について取り上げた。大きな特徴として“分野を限定しないこと”を挙げて参加者を募集した。

最初に分科会担当者の徳田さんから10分程度の話題提供があり、その後4つのグループに分かれて1時間のディスカッションを行った。メインルームに戻って各グループで話し合った内容を発表してもらい、徳田さんから全体のまとめと、分科会担当者の諏訪さんと小林から一言ずつコメントして終了した。

2. グループ分け

参加者数は最大で22名、途中参加は無く、途中で抜けた方は2名ほど。事前に「移動中に参加するため、視聴のみで発言はできないが問題ないか」等のお問い合わせが複数あり、「ディスカッション中は適宜チャットでご対応頂ければ問題ない」旨、回答していた。

事前にグループ分けの案を作成する際は、チャット参加者が同じグループに固まらないように、また同じ地域グループの人が固まらないようにして、できるだけ普段話す機会のない方と交流できるように配慮した。当日、実際にグループ分けする前にもチャット参加希望の方は申し出るよう呼びかけ、微調整を行った。少人数になってしまった2つのグ

ループには分科会担当者が1名ずつ参加した。

3. 感想・反省など

昨年の「利用者支援」分科会ではグループ討議の時間を40分程度取ったが「まだまだ話し足りない!」という参加者の声があり、今年は1時間とした。1グループ4、5人で1時間だと1人当たりの持ち時間は平均12～15分になる。全員が複数回発言する機会が得られる、いい時間配分だったのではないかなと思う。各グループの発表内容も多岐にわたっており、充実したディスカッションが行われたことが感じられた。一方で積極的に発言するタイプではない方が集まってしまったグループもあり「最初数分間、誰も話さなかった」ということもあったようで、グループ分けの際に場慣れしていそうな人を各グループに振り分ける等の配慮も必要だったか、というのが反省点である。とはいえ、そのグループも話し始めたら和やかに話が進んでいったようなので、グループ分けの前に「まずは自己紹介をしてください」などの指示出しを強めに言っておけば十分かもしれない。

また、「分野を限定せずに」参加者を募ったが、グループによっては医療系など分野が偏ってしまったところもあったかもしれない。事前アンケート等で参加者の現在の所属を確認し、グループ分けの参考にすればよかったか、というのも反省点である。

4. おわりに

手前味噌ながら今回とても面白い分科会になったと思うし、「レファレンスで困ったネタを語り合う会」というテーマはネタが尽きることは無いと思うので、2～3年に一度このテーマで開催して良いのではないかと考えている。その際には上記の反省点を生かして、よりごちゃ混ぜ感のある、普段会えない人と話し合い、普段聞けないような話を聞けるような、そんな刺激的な場を提供できたらいい

なと考えている。

(こばやし・やすな／北海道大学附属図書館)

初めての全国大会

地紙 慎太郎

今年の4月に新卒で北大附属図書館に就職して早半年、ようやく業務にも慣れ周りを見渡す余裕もできたところで、同じ課の小林泰名さんから今回の大学図書館研究会全国大会の話を知りました。年に1回で今年はオンライン開催とのこと。三連休ゆっくりしたいという未練もなくはなかったのですが、このチャンスを逃すのはもったいない・・・と思い参加することにしました。知識も経験もほぼないなかこうした大会に飛び込んでいくのは不安で、大会前日の夜は家で一人ナーバスになっていましたが、結果としては参加してよかったと思っています。今回は、そうした一新米図書館職員の視点で第55回全国大会の感想をつらつらと書いてみようと思います。

私が参加したのは1日目のウェルカムガイダンスからでした。大図研に入会したのが8月の下旬ごろで、そもそも大図研って何?という状態からのスタートだったので、大図研の概要や会員の方々の雰囲気を知ることができるちょうどいいガイダンスでした。そのあとの会員総会ですが、思っていたより堅苦しくない総会だなという印象でした。前半の決算報告の話などは「そうなのか」と思いながらひたすら流れてくる説明に耳を傾けるのみでしたが、後半の退任・就任の挨拶は、これまでどんな思いで活動してきたのか、これからどんな方向に進んでいきたいのかといった一人ひとりの思いや人となりを垣間見ることができ、総会に出席してみてよかったと思いました。

一日目の午後は研究発表・事例報告に参加しました。「図書館の実空間とデジタル資源の接点をデザインする」「『Book: The Gathering』：知の劇場で謎を解く、近畿大学ビブリオシアター発のプロジェクト」とともに興味深い報告で、自分でも実際に『Book: The Gathering』のクエストを見てみましたが、本を読まなければ分からないような問題が多く、利用者が本を手取るきっかけとして面白い試みだなと思いました。

その後の課題別分科会では第3分科会キャリア形成「資格・検定を中心とした自己研鑽について」に参加し、ほかの参加者が日頃どのような取り組みをしているのか、どのような資格・検定を取得しているのか話を聞きました。個人的な話になりますが、私は司書資格すら持っておらず、働きながら司書資格を取るかどうか考えています。今のところ業務を遂行する上で司書資格がなくて困ったことはありませんが、図書館学を体系的に学びなおすという意味でも資格取得を目指すのはありだと思いました。また、勉強のモチベーションをいかに保つかという話では、一人でやるより仲間を巻き込んだほうがいいという意見がありましたが、私も似たような状況です。大図研に入会したきっかけが北海道地域グループの呑み会で、誘われるままに参加し、面白そうだったので入会、その後冒頭でも書いたように全国大会に誘われ、思い切って参加・・・というように、巻き込むというより巻き込まれるという形ですが、私一人だと緊張して閉じこもってしまったり、だらけてしまうことが多いので、積極的に巻き込まれて周りから刺激を受けるようにしたいと改めて思いました。この分科会の後17時から交流会でしたが、思い立ったが吉日ということで気が付いたら紀伊国屋に向かっており、分科会で話に出た検索技術者検定や図書館情報学のテキストなどを手に取っていました。

2日目午前は第6分科会 利用者支援「レ

ファレンスで困ったネタを語り合う会」に参加し、少人数グループに分かれて自由に話をしました。私の主な業務内容はカウンター業務ですが、レファレンス担当は別であり、レファレンスを希望する利用者と担当者をつなぐ役割にすぎないため「困ったネタあるかなどうしよう・・・」という気持ちでの参加でしたが、逆に学生時代レファレンスについてどう思っていたのかをネタにできると気づき、幾分話しやすくなりました。話の中で「学生目線でどれくらい図書館のレファレンスサービスは期待されているか?」という質問があり、自分がどう思っていたのか思い返してみると、「図書館に頼るのは二の次で、まず教授や研究室の先輩に相談」だったと気づきました。ちょうど昨年の今頃卒論に行き詰まっており、資料探しのために図書館にレファレンスをお願いしようと思っていましたが、教授と話をしたところ解決したため、結局一度もレファレンスサービスを利用しませんでした。図書館職員と教授を比べると、毎日顔を合わせている分教授の方が距離が近くて気軽に質問することができるため、学生が真っ先に図書館に聞きに行くというのは少ないのではないのでしょうか。大きな図書館と少人数でやっている図書館では違うのかもしれませんが、図書館職員としてもっとどうしていくべきなのか考えさせられる分科会でした。

午後のシンポジウム「学生協働の現在」では、学生協働活動を終了した図書館、継続している図書館、活動内容をリニューアルした図書館の3つの事例を紹介していただき、学生協働の未来を考えました。私自身学生の頃からワークスタディという形で本の電子化作業や蔵書点検といった簡単な雑務を通じて図書館の仕事を経験してきましたが、学生協働はどちらかというと展示や広報、イベントなど利用者と図書館を繋ぐような外向きの活動が多く、自分が学生時代やってきたことを別

の視点から振り返るきっかけにもなりました。

今回初めての全国大会でしたが、参加して本当に良かったです。一つは大学図書館を中心とした職員の方々がどんな人なのか雰囲気を知ることができたからです。対面だとまた違った印象を抱くかもしれませんが、オンラインでも皆さんの話を聞いていると面白い人優しそうなたくさんいるなという印象を抱きました。惜しむらくは1日目の交流会に参加できなかったことです。来年以降参加した場合は皆さんよろしくお願いします。もう一つは図書館で働くモチベーションアップに繋がったからです。1日目2日目の分科会どちらとも他の図書館で働かれている方の話を聞くことで自分のキャリアや将来について考えるきっかけになりました。

最後になりますが、大会実行委員をはじめとした運営に関わる皆さま、今回このような機会を提供してくださりありがとうございます。

(ちがみ・しんたろう／

北海道大学附属図書館)

スクリーン越しに感じる 全国のつながり

伊賀 由紀子

今年の第55回全国大会は、大図研として4回目のオンライン大会でした。コロナの影響による初のオンライン開催は2020年大会。その後、いずれの大会も参加させてもらいましたが、回を重ねるごとに大会形式として成熟してきたと感じます。

今回の新たな試みとしては、大会日程の短縮や、実行委員の背景をQRコード付きの統一画像にしたこと、待機時間に協賛企業のプ

ロモーション資料のスライドショーを流したことなどが挙げられます。おそらくそれ以外にも、参加者には気づきにくいようなところでさまざまな工夫がされているのだろうと想像します。

これまでの大会でも、オンラインならではの機能・特性を多く体験し学ばせてもらいました。Peatixのようなイベントの告知・集客サービスがあるのも大会を通じて、初めて知りましたし、Zoom機能のうち、ブレイクルームやホワイトボードの共同編集なども大図研大会の分科会が初体験だったと記憶しています。

言わずもがなではありますが、オンライン形式によって、参加のハードルも大幅に下がりました。さまざまな事情で宿泊を伴う外出や長距離移動が困難な人でも、オンラインであれば参加が可能となり、リアルではお目にかかるのが難しい方とも一緒にできます。

実際に今回も、北海道から九州まで全国からの参加者の皆さんと貴重な時間を共にすることができました。大会中、お子さんやペットが画面にちらっと現れたりしてほのぼのとした空気が流れるのも、気軽な意見交換の場として好ましく感じます。

発表者だけでなく、参加者からテーマに関する参考文献やサイト情報などがチャットで随時提供されるのもオンラインならではの。今回の分科会でも、あとでゆっくり読まなきゃ、という情報のお土産を大量に持ち帰らせていただきました。

このように書くと、オンライン押しのように思われるかもしれませんが、一方で交流という点では、やはりリアル会場にはかなわないと感じます。プログラムの合間に名刺交換や知り合いに声をかけての雑談ができませんし、オンラインでの交流会では、少人数であればまだしも、画面上に表示しきれない人数

になると、まだまだ主催者・参加者ともに慣れが足りないという印象を受けました。

すでに一部では実践されているかもしれませんが、プログラム終了後もしばらく部屋を開けたままにして雑談を促すとか、談話室のような場を用意するのも一つの方法かもしれません。

私が初めて大図研の大会に参加したのは1990年の第21回神戸大会で、参加者が全員同じ宿に泊まる合宿型でした。その後、開催地の回り持ちがなくなったり、実行委員会形式になったり、オンライン形式が導入されたりと少しずつ大会の形も変化してきましたが、今も私にとって、楽しい夏の年中行事です。

もちろんこれらの大会は、常任委員や実行委員の皆さんのご尽力によって成り立っていることは言うまでもありません。今年も大会を支えてくださった皆様に、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

来年の大会が、どのような形式で行われることになるかまだわかりませんが、より多くの会員が関わり、知恵と力を出し合うことで、更にわくわくできる魅力的なイベントとして進化していくことを期待したいと思います。

(いが・ゆきこ／大阪公立大学図書館)

久しぶりに全国大会に参加して

中條 将喜

大学図書館研究会第55回全国大会の参加報告です。全プログラムにも参加できず、中途半端な参加であったため、大会フラッシュ号への原稿依頼があるなど予想もしておらず、動揺・緊張しながらの原稿です。みなさま、ご容赦ください。

全国大会への参加は何年ぶりでしょう。コロナ禍とほぼ同時期にわたくし長く体調を崩しておりました。コロナが原因ではないのですがメンタルに不調を再発し、大学図書館研究会（以下、大図研）での活動もしばらくお休みさせていただいておりました。復帰できるかも怪しい状況から少しずつ活動を再開し、今年の全国大会には思い切って参加申し込みなどした次第です。オンラインでの開催も久しぶりの参加となるわたくしには都合がよく、大変助かりました。

さて、研究発表・事例報告や課題別分科会への参加など。久しぶりに参加でき、多くのことを学びたいと思っていましたが、運の悪いことに急な家族の用事があり、各プログラムへの参加もスマートフォンでの参加となり、少々不便を感じました。しかし、ここ何年かの社会の変化のおかげでこのような形でも参加可能な全国大会はとてありがたく思います。2日目のシンポジウムや自主企画などもお話を伺いたかった。悔やまれます。来年こそは、じっくり腰を据えて参加できるようにいたします。

初日の交流会も途中退席となり残念でしたが新会長をはじめ、たくさんの方の顔を拝見することができて、みなさんのお話しもうかがえて、元気を分けていただきました。今までさぼっていた地域グループでの活動も含めてあらためてやる気満々で今後に生かしたいと考えています。大図研のありがたさを今更ながらに痛感する次第です。全国にはこんなにたくさんの仲間がいることって本当に嬉しいですね。

当方所属の北海道地域グループにも新しい仲間が増えておりました。来年以降に昨年のお阪のようにハイブリッド開催であったり、各地で開催の行事などの席で一緒できれば

北海道の新しい仲間たちをぜひ全国の皆さんにご紹介したいと考えています。全国の大図研の仲間たちとつながることで、さらに大図研の良さを感じていただきたいと思います。

はて？ 全国大会への参加感想などについての依頼を受けたのに、ほとんど全国大会の内容に触れていないうちに字数が足りなくなってきました。

最後になります。ご存じの方もいらっしゃるかと思いますし、編集担当のみなさまも承知の上で原稿依頼をしたのだと。わたくし、本誌「大学の図書館」にお酒の話題しか投稿したことが無いのです。だめ会員ですまぬ。(No.503,505,515,533,550 ご参照ください) 本稿でも触れさせてください。初日の交流会。スマホ越しに見える飲みながらご参加されている全国のみなさま。とてもうらやましいw 昨年大阪では地酒の会はどうしたんだろう？ とか、広島地域グループのさよさん（相変わらずなれなれしくてごめんなさい）は、お元気だろうか？ また、お手製のお酒が飲みたいっ！ とか。お酒のことばかり考えて全国大会は終わりを迎えました。また全国の素晴らしい仲間たちと宴を催せる時を楽しみに、仕事も地域グループの活動もがんばります。みなさま、今後ともよろしくお付き合いください。

(なかじょう・まさき／

北海道大学附属図書館)
nakajo@jimuhokudai.ac.jp

大会実行委員であり、 大会参加者であること

小村 愛美

昨年、今年と全国大会の実行委員に参加し

ていました。コロナ禍の前にも実行委員をしたことはあり、地域グループで全国委員をしていた時期には分科会担当として全国大会に関わってきましたが、本稿ではここ2年の実行委員の経験に焦点をあてて書いています。

2023年の第54回大会の際は、大阪での会場担当を務めました。前年の冬から翌年春頃まで会場探しと予約作業を行っていて、その後体調を崩してしまったために大会当日まであまり貢献できなかったのですが、当日の動線・必要な備品や掲示物・会場使用ルールを鑑みて各プログラム担当者と会場との連絡を取り合ったり、オンサイト開催ならではの実地の作業が多かったと記憶しています。一方、今年の第55回大会ではオンライン担当を務め、前年の担当とは異なる作業を多く経験しました。

オンライン担当の仕事は、ZOOMアカウントの取得（今大会は合計4つ）、参加者向けと分科会担当者向けのマニュアル作成、大会の1～2週間前に接続テスト、当日の日時で会議を設定し、各プログラムのURL一覧を作成、プログラムの合間に流すスライドテンプレートの準備、当日は手分けしてZOOM会議を開始・共同ホストとしてサポート・記念撮影のキャプチャを撮る、等々です。5月の実行委員会キックオフミーティング後に仕事を進めていきます。多くの作業は、もう1人のオンライン担当の松原さんが主導して進めてくださいました。

会場担当の場合は、先述のとおり前年冬から会場探しを始め、開催年の初春頃には会場のめどをつけて全国委員会の承認を受ける段取りになります。もっと早ければ会場の予約も取りやすい可能性がありますし、過去には全国大会の場で次回大会の会場が発表されたこともあるので、オンサイト開催に手を挙げたい場合は1年前から会場を確保するのもよろしいかと思います。

会場担当にとって最大の課題は、全国大会

に適した会場を確保できるかどうかです。必要な部屋数、設備やネット環境が揃っているか、立地が適当かを確認し、大会の開催時期(8月～10月)の週末に2～3日連続で空きがあり、会場費があまり高額でない会場を見つける必要があります。秋は学会シーズンでもあるですし、その他のイベントも早いところは1年前から予約を入れていたりするので、条件を満たす会場と日程はなかなかありません。

オンサイト開催の大会では、アンケートで「もう少しこういう日程が良い」といった希望が寄せられることがあります。まず大会を開催できる条件の揃った会場がいつ空いているか、という点が大きなウェイトを占めるので、日程はあまり自由にならないのが実情です。

近年の大会実行委員会では、毎年タスク管理ツールのBacklogを使って準備作業の共有・進捗管理が行われています。便利なツールですが、準備作業が佳境に入ってくるといくつもの課題が並立して同時進行していくので、個人的にはついていくのが大変な時もあります。ただ課題の数から、全国大会がどれほど多くの準備を経て開催されているのかがみて取れますし、Backlogとファイル共有用のOneDriveのおかげで、キックオフミーティング以後は実行委員が集まらなくても大会が開催できているのだらうと実感しているのも事実です。

以下は個人的な話ですが、大会実行委員をしていると、参加者に向けた連絡や資料を確認するのが後回しになりがちな時があり、大会当日にやや慌てることもありました。また所属している地域グループ内への目配りも、普段よりは大会準備に傾倒しがちなところがあり、大会に関する問い合わせが地域グループ長である私への個別メールで届くと返信が遅れたり、慌てて大会実行委員会への問い合わせをお勧めすることがありました。

そんなこんなで迎えた大会当日はやはり楽しくて、情報や知識とともに力をもらえることが多かったです。新会長の楫さん、前会長の呑海さんのご挨拶からも力をいただいて、大図研は「失敗できる場」であること、大図研で経験したノウハウを職場に活かせるという点には深く同意しました。やってみたいことを職場で試みると、内容や規模によっては実現までにクリアしなくてはならないハードルが多かったり、ハードルを超えるうちにやってみたいことの芯が揺らいだり変形していく場合があります。大図研なら、例会企画や組織運営についてまずはやってみることが可能だと思います。

全国大会は、多くの実行委員の分担により、様々なインプットとアウトプット、交流ができる濃い時間が実現できていると思います。運営は毎年振り返りと次回への申し送りを繰り返して、少しずつ改善がはかられています。実行委員をしていると、全国大会の裏側はこうなっているのか、という発見があるし、複数年担当している方はどんどんやり方がこなれていっているとも感じます。大会運営の経験が、職場での会議や人が集まるイベントに役立つ部分も多いだろうと思います。全国大会がもうちょっと○○になったらいいな、といった要望がある人は、自分の要望を叶えることができますので、大会実行委員に加わってみるのはいかがでしょうか。

(こむら・いつみ／大阪大学附属図書館)

大会実行委員から： 企業協賛の振り返り

渡邊 伸彦

第55回全国大会は2024(令和6)年9月21日(土)～22日(日・祝)の全2日間でオンラインにて開催されました。私は2017年

から大会実行委員として参加し、8年目になります。特にそう企図したわけでもないのですが、当初から企業協賛の担当をさせていただき、年によっては他の担当との兼任もあったものの、ずっと協賛企業の皆さまとやり取りする立場となっていました。この間、コロナ禍によって大会の在り方は大きく変化してきたものの、大会の企業協賛が途切れたことはありません。これはひとえに、協賛企業の皆さまが大図研に対して信頼・期待を寄せてくださっている結果であり、これを一時期の担当として裏切ってしまうことが無いように、細心の注意を払って対応することを心掛けてきました。今回の大会フラッシュ号では、このように大会実行委員として関わってきた企業協賛について、今までのエピソードに触れつつ、今大会のトピックを紹介し、今回のことに少し思いをはせます。

1. 第48回 (2017) ～第54回 (2023) のこと

第48回大会は京都で開催され、開催地区の京都支部（現在の京都地域グループ）の所属だったこともあり、大会運営に関わることになりました。当時はあまり前回大会から引き継がれるようなものも少なく、手探り状態で行ったように記憶しています。地域開催の大会では、地元の企業が協賛に入ってくれることも多々あり、当時の企業協賛担当の積極的なアプローチで、多くの企業に協賛いただきました。また、オンサイトならではのことで、大会に参加された協賛企業の方と空き時間にご挨拶をした際に、協賛という形で大会・会員とつながりをもつことができることが、企業にとっても有益であることを改めて教えてもらうこともありました。

以前は、協賛の特典として、予稿集の広告出稿と、大会Webサイトのロゴ掲載を主なものとしていましたが、有料/無料の特典を追加することで、より大会と企業の関りを深くすることもできました。オーラルプレゼン

テーション、大会用X（旧Twitter）による広告、大会への招待、会報「大学の図書館」への広告出稿など、様々な特典を試行錯誤しながら、よりよい企業との関わり方を模索してきました。

また、コロナ禍でのオンライン形式での大会開催については、当初、どのような進め方になるのかの想像も難しく、集客力に疑問を持たれた企業から協賛を見送る際に、率直なご意見をいただくこともありました。これはとても印象深く残っているエピソードで、オンライン・オンサイトの区別に関わらず、大会の予告の段階で協賛をしたくなるような広報の展開が必要であることを、強く意識しました。大会の価値が伝わらなければ、協賛の価値を感じてもらえず、協賛につながらないという、協賛個別の問題だけでなく、大会全体の在り方にもかかわるものだと思再認識しました。

2. 第55回 (2024) のこと

第55回大会は、実行委員会体制で実施されましたが、実行委員に全国委員会委員が加わってもらうことでかなり大人数での実施体制を組むことができ、様々なアイデアを出しながら計画・実施を行うことができました。第52回大会から、プロジェクト管理ツールのBacklogを使用することで、タスクレベルで整理・処理可能な仕組みを取り入れるとともに、オンサイトである第54回の記録、直近の完全オンラインの大会だった第53回の実施内容や検討過程を直接参照できるため、スムーズな検討が行えました。また、クラウドストレージとしてOffice365を維持しているため、過去に使用した電子ファイルの参照も容易に行え、初めて担当する人にとっても取り組みやすい環境が整ってきているという印象です。

今回は完全オンラインの大会としても4回目となるため、かなり実施の知見は蓄積でき

ているとともに、実行委員も他のオンラインイベントでの経験があり、オンラインならではの取り組みについても積極的な検討が行えました。企業協賛では、オンライン会議室が待機の時間に、スライドショーとして表示させる待機スライドを作り、そこに協賛企業の広告・案内を載せることで、オンサイト大会での広告物配布等と同じような効果を狙えないかと考え、協賛特典として新たに追加しました。結果的に10社の参加があり、大会期間中の複数個所で放映することで、協賛企業のアピールができたのではないかと思います。（大図研のシンボルマークを組み込んだスライドテンプレートを作ることで、大会運営側からの一体的なメッセージであることがアピールできたことも特徴的かと思います）

お昼時間を使ったプレゼンテーション企画も行い、多くの参加者に参加していただけたのはとてもよかったのですが、ビデオ放映する際、Zoomの画面上に一部欠損部分のある状態での放映となってしまうというトラブルがありました。Zoomを含めたオンラインツールはその機能更新が頻繁で、以前は問題なく行えていたことが、ある時うまく行えなくなることも、ままあります。以前の大会でビデオ放映がうまくいっていたとしても、経験を過信するのではなく、イベントの準備は入念に行うべきと、反省しました。

3. これからの大会のこと

大会の開催がオンサイト・オンラインのどちらになるかは、諸所の事情を勘案した結果になるので、これからもパターン化されるかはわかりませんが、大会実施にあたり、協賛を通じた企業との交流をこれからも続けていくこと、またより良い協賛の内容を検討していくことは、大切なことだと思います。

オンサイト・オンラインそれぞれの協賛方法・特典の事例は巷に多く存在し、会員それぞれも見聞きされているところだと思います。

す。ぜひ会員皆さんのアイデア・提供事例を活用しながら、よりよい協賛事業の実施を進めたいので、何かありましたら、私、あるいはdtk-MLや常任委員会など、投げかけやすいところにまずはご連絡いただければ幸いです。皆さんで大会を作っていければと思います。

末筆となりましたが、今までの大図研全国大会にご協賛いただいた企業の皆様方へ、改めて厚く御礼申し上げますとともに、今後もよい交流ができますようご協力を賜りたく、重ねてお願い申し上げます。

【参考】近年の大会の協賛企業数の推移

回次	開催地	協賛企業数
第45回(2014)	山形	9社
第46回(2015)	札幌	7社
第47回(2016)	広島	17社
第48回(2017)	京都	23社
第49回(2018)	九州	23社
第50回(2019)	神戸	22社
第51回(2020)	オンライン	13社
第52回(2021)	オンライン	14社
第53回(2022)	オンライン	16社
第54回(2023)	大阪+オンライン	17社
第55回(2024)	オンライン	17社

※協賛企業数は、大会Webサイトの協賛企業リストより

（わたなべ・のぶひこ／

京都大学医学図書館（京都地域グループ）

大学の図書館 第43巻第10号 (No.611) 2024年10月25日 (毎月25日発行) ISSN: 0286-6854
編集・発行: 大学図書館研究会 年間予約購読料: 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒305-0033 茨城県つくば市東新井10-1-111 マザータンク気付

E-mail: shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> 三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座: 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail: dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00190-2-79769 大学図書館研究会

議事要録

2023/2024年度 第4回全国委員会

日時: 2024年7月31日 (日) -2024年8月7日 (水)

場所: メール審議 (フォーム回答)

出席者 (敬称略):

小林 (北海道地域グループ)、加藤 (千葉地域グループ)、山上 (京都地域グループ)、諏訪 (広島地域グループ)、柿原 (九州地域グループ)、楫 (学術基盤整備研究グループ) (以上、グループ推薦全国委員)、呑海、赤澤、上村 (以上、常任委員)、澤木 (以上、常任 (特定) 委員)

2023/2024年度 第5回全国委員会

日時: 2024年9月21日 (土) 9:00-9:20

場所: Zoom

出席者 (敬称略):

小林 (北海道地域グループ)、加藤 (千葉地域グループ)、下山 (東京地域グループ)、中川 (東海地域グループ)、山上 (京都地域グループ)、吉田 (大阪地域グループ)、徳田 (兵庫地域グループ)、諏訪 (広島地域グループ)、柿原 (九州地域グループ)、楫 (学術基盤整備研究グループ) (以上、グループ推薦全国委員)、呑海、赤澤、上村、有馬、北川、小山、和知 (以上、常任委員)、青山、磯本、澤木、中筋、渡邊 (以上、常

任 (特定) 委員)、野村、松原、山口 (以上、全国大会実行委員)

◆議事の詳細は以下からご覧ください。

<https://www.daitoken.com/committee/>

組織通信

7-9月分 (2024/7/1-2024/9/30) (敬称略)

○入会 4名

無所属

DUTKA MALGORZATA

高野 聡

北海道地域グループ

地紙 慎太郎

大阪地域グループ

松岡 美佳

○退会 なし

○2024/6月末付 3年間会費未納による除籍 7名

(3年間会費未納の会員は、会員資格停止 (除籍) とする申し合わせ

(2018/2019年度第4回全国委員会了承) に基づく)

以上、現勢323名